広報 つどい

中野区青少年育成
東部地区委員会
広報部
090-9317-4696

平成28年3月発行
第134号

環境部の 駆け込み体験

平成27年10月18日(日)★参加者38名

不審者は38歳？

4年男子と1、2年女子の4人は東部区民活動センターを中野坂上駅方面へ出発。坂上信号の手前で最初の不審者が声をかけてきました。手をつかんできた不審者から「助けてー」と大声をだして走って逃げることができました。

↑不審者出現。手をつかまれる

→交番にたどり着く

交番の前で「何て言う?」「すみません、じゃない?」など急に不安になりましたが、4人で次々と不審者の特徴を話せました。狭い路地では「コンビニに行きたい。困ってるの。道を教えて」と手をつかんでくる不審者に遭遇。「助けて」こども110番の家に駆け込みました。

↑110番の家のお姉さんに「そこでね、そこでね」と訴える

ミニリーダー

「何歳くらいの人だったの?」の問いに「38歳」という答え。予想なのか、知っていたのか、思わず笑ってしまいました。

「お家の人に迎えに来てもらおうね」。4年生の男子は暗記していた家族の電話番号を伝えることが出来ました。

「こういう時、防犯ブザーがあるといいよね」と子どもたち。残念ながら今日は全員持参していませんでした。

→「通報しよう」。てきぱき対応するコンビニ店員

↓警察のカウンターに鈴なりになって通報

「コンビニに駆け込んだら、『110番してくださーい』と言ったほうがいいね」と中野署員。「何分くらい前、何歳ぐらいの、こんな服の不審者がいた、としっかり伝えてください。その110番通報が犯人を捕まえる手がかり」だそうです。

本当の不審者はいつどこで現れるかわかりません。いかにも怪しい人が不審者とも限りません。今日の体験を万が一の時にいかして欲しいと感じました。

ユニークな撃退法も

狙われた男子が、水筒をぶんぶん振り回して不審者を近づけない。「水筒攻撃、いいかも。空手の先生いわく、体に触らせないように何か振り回すのは良い手だって」

←ユニークな撃退例　腕をつかまれ「うんちっ」と叫んだら、不審者がひるんだ。水筒を振り回して不審者に身体を触らせなかった子もいて「有効」

閉講式

平成27年12月13日(日)★参加者33名
★東部区民活動センター

「チャレンジできれば、友だちができる！　なんでもできる！」を合い言葉にさまざまな挑戦を続けてきたミニリーダーたちが、閉講式で1年を振り返りました。

皆勤賞の表彰では、栗山育成部長がひとりひとりのはなまるエピソードも紹介。「包丁を持てるようになりました」「アイデアを発言できるようになりました」など褒められた子どもたちは、うれしはずかしの表情で原島恵子委員長から賞状を受け取りました。

活動を記録したDVDを鑑賞したあと、北見靖直講師が「ゲームだ」と宣言したとたん、かちんとスイッチが入って、ハイテンション。さあ北見ワールド。イカ対カニ対エビで戦う世界一はげしいジャンケン大会。あっちむいてホイ。命令ゲーム。伝言ゲーム……。「もっと小さい輪になって座ろうよ」。チームひとつになる姿。自然とみんな生き生きとした瞳で、はじけんばかりの笑顔であふれていました。

↓活動をDVDで振り返る

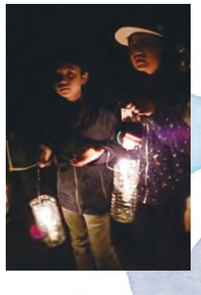
アドベンチャーキャンプ

平成27年10月10日(土)～11日(日)
★ひのはら緑の休暇村★参加者31名
★北見靖直講師★青年ボランティア9名

↑青年ボランティアに守られて

→お手製のランプでナイトウォーク

キャンプファイアー



サバイバルウォーク

↓暗くなってカレー作り開始

初めて北見講師によるキャンプに参加して、こんなに密度の濃いキャンプってあるの?と感激しました。のんびりする時間もないまま、いっきに過ぎた2日間でした。

豊かな自然の中で、子どもたちは青年ボランティアに助けられながら各班で活動。北見講師から出される課題を各班独自のカレーの材料を得るためのゲームとして行い、調理を始めたころにはすでに暗くなっていました。無事完食。その後、手作りランプの明かりで裏山を散策。そしてキャンプファイアー。

翌朝は雨でしたが、雨具を着て緊張の川渡りとニジマスのつかみ取り、さらにニジマスを自分でさばいて炭火で焼いて食べる。片付けが終わった時は、帰路の出発が迫っていました。

北見講師の指示に全力で反応する疲れを知らない子ども達。やさしくサポートしてくれる青年ボランティア、裏方としての沢山の仕事をこなす育成部メンバー。素晴らしいキャンプでした。

（委員長　原島恵子）

↑自分のニジマスをつかまえる

↑ニジマスをさばく

↓ニジマスをみんなで食べる

きれいに食べました

キンボール ミニリーダー

平成27年11月1日(日)
★参加者31名★塔山小学校体育館

←ひとりで「ガシッ」と受け止める
↓コーナーを見守るプー

皆勤賞

【塔山小】2年	青山白夜	大里 鈴
	小松原咲希	塚越 颯 笹嶋 剛
3年	岡村竜斗	鈴木里於
4年	飯村 碧	笹嶋 秀 高橋周吾
	大石将馬	原ゆずほ 松井一星
	山下航輝	山本優貴
5年	髙木千尋	塚越晴貞 林田和奏
	山本秀太	井上まゆ 小堀有紗
【谷戸小】2年	須藤芹菜	堀内彩花
【桃園小】5年	大口莉穂	佐藤愛美 戸川 凪

精勤賞

【塔山小】2年	関沢小粋	長洲穂希
3年	小森万凜	長谷部祐
5年	立川佑哉	的場 迅
【谷戸小】2年	武田真咲	
5年	堀内幹大	
【桃園小】3年	奥 美奈	
5年	柴田実和	加藤 凛
【竹早小】3年	古幡千夏	
【新井小】6年	髙山梨花	

【環境ポスター展示】

平成27年7月31日～9月3日
大江戸線中野坂上駅通路 107枚

【新年会】平成28年1月8日(金)

↓新年会名物 負けても楽しいジャンケンゲーム

新年会のお弁当

【委員研修】平成27年12月11日(金)東京地方裁判所 参加者 34名

東部地区委員会、年一回の研修で今年は裁判の傍聴に行ってきました。裁判の傍聴は初体験で変な緊張感がありました。

裁判が始まる10分前に入室ができ、席に着きました。室内は異様に静か…静か過ぎて気持ち悪いほど。普段の生活ではどれだけの雑音の中で過ごしているのかと実感し、裁判が始まるまでがえらく長く感じてしまいました。

傍聴したのは覚せい剤取締法違反の裁判でした。「してしまったことでその先どうなるかなど考えず、ほんの出来心やこれぐらいなら…という自分の甘さが事の大なり小なり、事件を引き起こしてしまうのだ」と感じました。自分はもちろん、子供にも物事の良し悪しを自分で判断し、決断できる人間でなくては！と気が引き締まる思いでした。

いい経験になりました。

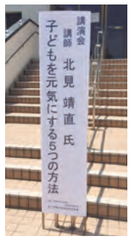
↓緊張感はまだない集合時

君は、君だからいいんだ

～子どもを元気にする5つの方法～

【講演会報告】平成27年7月10日(金)

講師：北見靖直 氏（国立青少年教育振興機構指導主幹 東部ミニリーダー講師）



北見講師が東部のミニリーダーを育て始めて13年目。最初は新しい講師に慣れない子どもたちに蹴られたりしながら、リーダーの誇りを持った子どもや、熱い育成者を育ててくれました。

子どもをほめなきゃいけない、って言うじゃないですか。でも、なぜ？ なぜ、声をかけてあげなきゃいけないの？ なぜ、信じなきゃいけないの？

私はその答えを、不登校の子に教わりました。ピュアで真面目だからこそ、周りと折り合いがつかず心を閉ざしている。そういう彼らと30日間のキャンプを始めました。

NHK・福祉ネットワークの枠で放映された『ゆっくり、前へ』を視聴。「引きこもり」の若者10人が、御殿場にある「国立中央青少年の家」に集まる。人とつきあえない自分に苛立ち、自分を変えたくて、30日間のキャンプに応募した。日中は牛小屋や介護施設でのボランティア、宿舎では共同自炊、最後に4日間の富士登山で自分の限界に挑む。

2人の若者がクローズアップされる。いじめられた経験から、小さなきっかけで排他感情にとらわれ自制がきかなくなる26歳男性I。夢だった介護福祉士の仕事についたものの、忙しさの中でリズムを崩した女性K。「つらいと仕事や目標を投げ出す自分。昨年あきらめた富士山に再挑戦して、自分を変えたい」。

登山3日目、Iが遅れ始める。「かっこ悪く見える自分」という自縛から抜け出せなくなる。励ます仲間に「おれの何が分かるんだよ」と当たる。座り込んで「やめます。かっこ悪いじゃないですか」。隣にしゃがんだ北見さんが強い口調で「かっこ悪いとだれが言った。よく戦ってるじゃないか。よく軍手をはめたな、と俺は思ったぞ」。再び登り始めたIを、歩調を緩めた「仲間」が待っていた。

彼は頂上に到達して、「仲間を信じるとか、正直考えたことがなかった。こうやって支えあえれば、自分の殻を破れるかも」と語る。直後、何を思ったか下山していく。下ではKが足の痛みで挫折しかけていた。Iは「おれでも何か出来ることがある」と、Kのリュックを担ぎ、ともに富士頂上に立つ。

人材を構成するのは「スキル」「センス」「マインド」の3つだが、マインドがなおざりにされています。厚労省がやっている引きこもり救済は、履歴書の書き方指導ぐらい。大学は就職率アップに力を注ぎ、即戦力と言っているが、つまり、育てない。若者は使い捨てです。

資料『ビッグコミックオリジナル』のコラム「育てるチカラ」を紹介。流通経済大学サッカー部の中野雄二監督。部が強豪に成長した要因は、「協調性」を育てる全寮制。監督自ら200人分の朝食を作る。このテーブル拭いてと指示すると、そこしか拭かない。注意しても、ここを拭けと言われただけだと。そういう選手が仲間やチームのためにプレーできるとは思えない」。子どもが幼稚な原因は、大人による教育の手抜き。「才能を開花させようとするから、子どもはわがままになる。人間として成長すれば才能は自然と開花するものなんです」

大学の「人間力育成センター」のような場所、そこではトイレの個室にパンくずが落ちていたりする。

私もこんな人間なので、組織に干されたことがあります。まず、笑えなくなりました。次に色のついたシャツを着られなくなった。そして、ご飯をひとりで食べたいと思うようになった。「空気が人を殺す」という言葉の通りです。何かをする気力がなくなる。トイレでひとりパンを食べる、というわけです。だからこそ、「おまえはおまえでいいんだよ」と声をかけるんです。だめだめだと育てられ、潜在的に植えつけられた自己否定感を打ち消すんです。

キャンプに来る若者は、自己紹介すらできない。だから、食事をしながら話すんです。まず一緒にいる。その上で、一に名前を呼ぶ。二に褒める。そして、役割を与える。逆に言えば、見ない・聞かない・呼ばない、役を与えないことが、子どもをだめにします。「ありがとう」は魔法の言葉。「名前プラスありがとう」で魔法です。子どもが10人いれば、そのうち2人は「一を聞いて十を知る」タイプ。6人は普通の子。残る2人は場になじめない。（魔法がきいて）2＋6＋2がちゃんと10になったとき、ものごとが動きます。

キャンプではすべて自炊。ビュッフェで並んだものを食べていたら何も変わらない。みんなで作って食べるから、拒食・個食・過食が治る。料理を作って「おいしい」と言ってもらうことが自己肯定につながります。東部のミニリーダーキャンプでも、流しそうめん、竹細工、カレー作り、ごはん炊き、そういう作業がいちばん力になります。そして、たとえば最後まで掃除をしている子を見つけたりします。生ゴミ受けまで掃除する。普段見えないその子を見ることができます。

人は、人に出会って人になる。親や教師との縦の関係ではなく、友だちとの横の関係でもなく、ちょっと年上の先輩との「なぬの関係」が、とても大きい。ぼくが何か言うより、「しゅうまい（青年ボランティアの愛称）」のような先輩に言われた言葉のほうがずっと入る。家族の人数が少ない現在、親や教師、塾の先生と、なかなか世間話ができない。世間話ができる大人、信頼関係の中で話せる相手を、子どもは求めているんです。

前年度の東部ミニリーダーの閉講式の朝、早めに来た女の子が、育成者たちが準備や打ち合わせをしている舞台裏を見て、「育成者のみなさんのおかげでわたしたちが楽しめた」と話してくれました。恩返しの法則というのがあってね、将来こういう地域の力の中で育った子どもが、きっとPTAや地域で働いて、法則を証明してくれるでしょう。